
ハムエの耳はパンの耳

煉火赤駈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハムエの耳はパンの耳

【Nコード】

N8256L

【作者名】

煉火赤駆

【あらすじ】

相戸祐輝はおみくじの託宣通り、運命の人と巡り合うが、彼女：ハムエはハムエッグトーストだった！？

一枚目（前書き）

この作品は以前部誌に使ったものです。

一枚目

『六月十五日。あなたは家を出て三つ目の四つ角で、パンをくわえて走ってきた人と激突します。それが運命の出会いです』

今年の正月に引いたおみくじにそんなことが書いてあった。

普通なら「んなアホな」で切り捨てるような話だけど、日付指定で結果が出るおみくじというのも珍しい。その神社ならではの特色かと思いきや、僕のおみくじにだけ日付指定が書いてあったらしい。そんな理由で妙に気になつたからだろうか。半年以上経つた今日、六月十五日当日でもそんなバカバカしいことを覚えてるのは。

だからって、こんなベタなコト書かれても半信半疑。

ドンツ！

とか考えながらぼーっとしていたら、三つ目の四つ角で誰かにぶつかった。相手がくわえていたハムエッグトーストが宙を舞う。

ちよ、ちよっと待って、本気で来ちゃったの？ 運命の出会い！？

「すみません。大丈夫ですか」

そうだな。くだらないおみくじはとりあえず置いておくとして、僕も十三歳。そろそろ彼女ができたら嬉しいお年頃。とりあえず精一杯のイケメンボイスを作って相手に手を差し伸べる。

「いつててて……」

その時。二人の間の空気が固まった。

「明っ！？」

「祐輝っ！？」

僕がぶつかった相手は幼馴染。我が家の隣にあるパン屋の子供で、小さい頃から一緒に遊ぶことが多かった。

奴の名前は藤棚明。これで「藤棚メイ」だったらどんなに良かっただろう。奴の名前は「藤棚アキラ」。性別、男。

「ぎゃあああああつ！」

嘘だ！ 運命の相手が男だなんて嘘だ！

「ゆ、祐輝、どした？ 大丈夫か？ 骨でも折れたか？」

「嘘だああああ」

「いや、全ツ然意味わからんけど、とりあえず落ち着け。な」

「何でお前がパンくわえて走ってくるんだ！」

しかもただのトーストじゃなくてハムエッグトースト、しかも黄身二個つて。無駄に豪華だな。流石パン屋の息子。

「これはさ、ホラ、宣伝活動！」

宣伝活動って？

「パンくわえて走ってたら目立つし息苦しいじゃん？」

わかっているなら何でやるんだ。

「だからさ、うちのパンはそれをしたくなってしまうぐらいウマイってことを身をもって示そうとしてたわけよ、俺は！」

「お前はその情熱を他に生かせ」

ツツコミを入れたが、内心僕は感心していた。こいつ、将来は家業一直線なんだよな。僕は将来のことなんてまったく決めてないのに。

「あの。お取り込み中すみませんが」

突然かわいらしい女の子の声が聞こえた。今度こそ来たか、運命の出会い。やっぱり相手が明じゃ困るし。

「突然ですが、あなたに一目惚れしてしまいました！」

またずいぶんとストレートな。

「あなたのお名前は？」

まあ、答えは性格と顔とスタイルを見てからじっくりと出すとして。

「相戸祐輝……」

「祐輝様っ」

僕は後者二つを確認するために声のした方向を向いた。それにしても、「様」って……。

再び、空気が固まる。

いや、あどけなさを感じさせるぽよんとした雰囲気の顔立ちも非の打ちどころがないし、中央が黄色く外側が白い布で覆われた左右のお団子ヘアもなかなか似合っている。スタイルも平均よりちよつと寸胴ぐらいで好みなんだけど。

まず身長がおかしい。十五センチぐらいしかない。

次に服がおかしい。太い茶色のラインが首周りと袖周りに入った黄色のＴシャツはまだ分かる。しかし、その下に履いているピンク色のミニスカートはどう考えてもデザインがおかしい。ヘリの黒いラインは「新手のゴスロリ」で許すとして、その少し上のあたりにある半透明のラインはなんだ？ 明らかにファッションとして変なのから透けて見える太ももがちよつとセクシーだったりする。それにもまして、最大限におかしいのが彼女の頭から、耳の代わりに生えているものだった。外側が茶色く内側が白くて長いそれを見て、一瞬ロツプイヤーのウサ耳かと思ったが、にしては先端が角張っている。

「君は何の生命体？」

僕は戸惑い、勢いでものすごく失礼な質問をしてしまった。

「……？」

告白少女は数秒間首をかしげて。

「ワタクシは何の生命体なのでしょうかー！？ それよりワタクシは誰ですかー!？」

逆に聞いてきた。もちろん知るわけない。何と答えていいのかわからないので、頼みの綱の親友に視線を送る。と、明は彼女のほう

をじつと見つめて、叫んだ。

「ハムエッグトースト！」

「はい？」

僕と少女は同時に訊き返した。

「こいつ、俺がくわえてきたハムエッグトーストだよ！ ほら、ちやんとハムに！」

明は彼女のスカートを指差す。確かにヘリがこんがりカリカリに焼けたハムのようなデザインに見えなくもない。

「卵。黄身もちゃんと二つ」

続いて、髪の毛のお団子。なるほど。確かに卵に見える。

「極めつけは、ホラ、パンの耳！」

続いて頭の両サイド。あー、なるほど。確かに言われてみればパンの耳。って待てい！

「何で人間（？）の頭から生えてるモンが一発でパンの耳ってわかるんだ！」

「どんな状況でもパンの耳をパンの耳と見抜けないようでパン屋の息子が務まるか！」

正論。しかし、こんな状況がそうそう何度もあるとも思えない。

「ワタクシはハムエッグトーストなのでしょうか？」

僕に訊いてくる告白少女。そういえば肝心のハムエッグトーストがどこにも見当たらないし、そう考えるのが妥当かな？ かなり疑問は残るけど。

「ところで俺達何か忘れてないか？」

唐突に明が訊いた。

「何かって？」

「いっけねー、学校遅刻すんじゃない！ 悪いけど先行くぜっ！」

僕は訊き返したただけだったのに、一人で会話を完結させて、明は学校の方向へ走っていった。すぐに角を曲がって見えなくなる。相変わらず、足、速いな。

「っと。僕もぼーっとしてたら遅れるな」

すぐに明の後を追おうとする。が。足首を思いきりつかまれて転倒した。

「まってください。ワタクシはハムエッグトーストですよ？　こんなところに転がっていたら鳥とか野良猫とかに食べられてしまいます」

急いでるし、できれば面倒なことに巻き込まれたくないんだけど……さすがに自分に告白してきた女の子が鳥とか野良猫に食べられるのは嫌だ。かといってここでじっとしてるわけにも。

「あーっ、もう、解ったよ！」

僕は少女を小脇に抱えて走り出した。間に合うかな？

「しっかりつかまってよ、ハムエ！」

「ハムエ!？」

「ハムエッグトースト略してハムエ」

「嫌です！　由来はわかりますがレディーにハムエなんて！」

これが僕とハムエの、いろいろな意味で運命的な出会いだった。

一枚目（後書き）

と、言うことで、部誌の販売が終了したので投下させていただきます。

ネコミミ、ウサミミが飽和気味の今、新しいミミのヒロインを書こうということで誕生したパンミミヒロイン、ハムエ。

これから彼女の話をつくり投下していこうと思います。

二枚目

僕が教室に駆け込むと、明はすでに着席して何事もなかったかのように一時間目の授業を受けていた。

「相戸君も遅刻……っと」

担任兼理科教師の野々宮先生が出席簿にマークを付ける。よかった、一時間目が野々宮先生の授業で。野々宮先生は遅刻しても黙って成績を引くだけで、怒鳴ったりねちねち指摘したりはしない。遅刻常習犯からはそのことで逆に恐れられてるみたいだけど、一回きりなら大丈夫。

「ま、今日は僕も遅刻しちゃったしね。遅刻は大目に見るよ。それじゃ、席について」

よし！ ついてる！ 僕は言われたとおりに席に向かった。僕の席は最後尾なのであまり目立たない。

「どうしたの？ 藤棚君はいつものことだけど、相戸君が遅刻なんて」

隣の席の巽エリカが振り向いた。ツインテールがさらっと靡く。大きな吊り目がこちらを見つめた。

「あー、実はさ」

どう説明したものと迷っている。

「あなた！ 遅刻してきた祐輝様を心配するそぶりを見せて、ワタクシから祐輝様を取ろうというおつもりですか！」

いきなりハムエが巽に噛みついた。比喻でなく、腕にがぶっと。痛っ！

「こら、ハムエ。やめろって」

「うーっ」

僕はあわててハムエを巽から引き離す。犬か猫みたいに巽を威嚇するハムエ。一目ぼれでこんなに夢中になれるものなのかな、女子って。怖い。

「だってこの女が」

だつてつて……普通に声掛けただけじゃないか。

「ちよつと、何よその子」

巽が僕を肘でつついた。

「ワタクシの許可なく祐輝様に触っちゃいけません」

ハムエが顔を真っ赤にして巽と僕の間に入る。教室中の視線が僕とハムエに集まった。

「こいつは……」

どう説明したものが迷っていると。

「ああ、こいつ、『藤棚ベーカーリー』の食パンで作ったハムエッグトースト！ 俺の朝飯だったんだけど、どういうわけかこんなになつちやつてさー。やつぱりうちのパンがウマすぎたのかな。ちなみに、祐輝と絶賛恋愛中だから応援よろしく！ ついでに『藤棚ベーカーリー』も応援よろしく！」

明が割り込んできて説明、もとい、宣伝した。助けてくれたんじやなくて、宣伝が目的らしい。

「はいはい、みんな、そこまでそこまでー」

わらわらとこつちに集まってくるクラスメイト達を、野々宮先生が制する。

「そりあえず、ハムエちゃん、だっけ。適当に空いてる席に座つて授業受けられるかなー？」

いや、先生。なんで生徒にする気満々なんですか。

「空いてる席ですか？」

この教室で空いている席といつたら最前列の窓際だよな。

「異議あり！」

何故か明が声を張り上げた。ご丁寧に指を突き付けるポーズも込みで。

「あんな埃っぽいカーテンの横じゃ、うちのハムエッグトーストに埃がかかります！」

いや、なんでそんなことを力説？

「あつ！ それじゃあ、アタシが前の席に移りまーす」
巽が席を立つ。

「わざわざ明のいうことなんか聞いて席移んでもいいって」「
いいのよ。ちようど最近視力が落ちてきて黒板が見えにくかった
し、アタシの席ならハムエちゃんも相戸君の隣になれるでしょ」

ハムエがぼつと頬を赤らめる。

「じゃあ、巽さんとハムエちゃんは席を動いてね。ちょっと時間食
つちやったから少し駆け足で説明するよ」

野々宮先生が黒板に向き直り公式を書き出した。やばい、途中参
加だから意味不明だ。後で誰かに教えてもらうか。

一枚目（後書き）

野々宮先生、フルネームはもちろん野々宮宗八（裏設定） W

三枚目

「では、授業はここまで。ハムエちゃんのごことは他の先生方に僕のほうから説明しておくよ」

チャイムが鳴ると、野々宮先生が手をたたき、手に付いたチョークの粉をはたく。やっぱり生徒にする気なんですね。

と、その瞬間。引き戸が開く音と同時にカメラのフラッシュ音。「なんですか、この音は？」

慣れてないハムエは不思議そうに首をかしげるが、この学校では日常茶飯事。

「ハムエ、隠れてろ」

僕は引き出しから適当なノートを出して、ハムエの前に立てる。

そして、叫ぶ。

「どこだ！」

その声を合図に、騒然となる教室内。

「前の扉でも、後ろの扉でもないとなれば」

「天井！」

「甘いわっ！」

そう叫んで、教卓の前の地面から生えてきたのは新聞部部长、読売香春先輩。

「ふっふっふ。『転入生は美少女ハムエグトースト。クラスメイトのU・E・と熱愛中！?』スクープはもらったわ！」

「床に隠し扉だと……！さすが最強の部活、新聞部」

クラスメイトの一人がたじろぐ。そう、普通学校で最強の部活といたら「プロを輩出した運動部」などだが、うちの学校は何故か謎の情報網を持つ新聞部が最強なのだ。生徒のプライバシーを粉砕し、あることないことでつち上げた壁新聞は、まさに校内の無法地帯。ついでに、僕のイニシャル「Y・A」なんだけど。

「フッフッフ……」

しかし、そんな校内無法地帯を前にしても臆さず、不敵に笑う男が一人。明である。

「残念ながら甘いのはそつちですよ、読売先輩」

「なんですって！」

「見る！」

明が自分の足元の床板を引つpegす。そこには巨大なオープンがあつた。

「床下に、オープン！」

「パン屋の底力を思い知つたか！」

明が胸を張つた。と、同時。コーン！ と気持ちいい音を立てて、二本のチヨークがそれぞれ明と読売先輩の頭にヒットした。

「藤棚君も読売さんも、教室を勝手に改造しちゃいけません。ちよつと職員室に来てね。それに罰としてカメラとオープンは没収」

がしつと二人の肩を掴んで、職員室に連行する野々宮先生。いつもの糸目と朗らかな笑顔が逆に恐ろしかった。

「この先生には勝てないな……」

「ほとんど初対面のワタクシですが、同意します」

僕とハムエは茫然と野々宮先生が出て行った扉を眺めていた。

「でも、新聞の記事は大丈夫だったのでしょか？」

「新聞部のことだから、きつと前みたいに『ジンジャーエールが機密データの入ったUSBを紛失！ 我が校の生徒が機密情報入手か』みたいな記事でもでつち上げるよ」

ちなみに例に挙げた記事は今年の一月第一週号。始業式の日、学校に登校してみたらいきなりデカデカと壁新聞にこの見出しだもんなー。炭酸飲料がなぜUSBを持っていたのか、ツッコむ気にもなれなかった。

「ハムエも気をつけないと変なスキャンダルつけられるよ」

四枚目

昼休み。僕、明、ハムエの三人は野々宮先生に呼び出された。

「失礼します」

僕は理科準備室の扉を開ける。野々宮先生は職員室よりこっちに
いるときのほうが多い。こっちのほうが落ち着くらしいけど、人体
模型とかが無造作に保管されている場所で平気で給食を食べている
のはどうかと思う。

「やあ、ハムエちゃん。授業はどうだった？」

「楽しかったです。もう、祐輝様がノートやシャーペンを貸してく
れたりなんかして、それはそれは幸せなひと時でした」

そんな嬉しかったんだ。

「授業の内容のほうはわかった？」

「はい。もう夢見心地で、授業を受けるどころではなかったのです
が、せっかく祐輝様から貸していただいたノートとシャーペンを無
駄にするわけにはいきませんので、ワタクシ、頑張りました」

聞いているこっちが恥ずかしくなるような発言を平気でするハム
エ。耳たぶが熱い。

「ところで先生。俺たちに何か用事？」

明が先生に訊く。

「いやあ、個人的な興味なんだけどね。ハムエちゃんって、普通の
ハムエッグトーストじゃないよね」

見ればわかることをいちいち確認する。

「ちょっと詳しく調べさせてくれないかな」

「詳しく調べるって……まさか解剖とかするんじゃない？」

「まさか」

否定する先生だったが、カエルやらへびやらのホルマリン漬けの
隣で言われても説得力がない。

「とりあえず、彼女が何の生き物なのか、確認するだけだよ。相戸

君も藤棚君も、ハムエちゃんがかビたりしたら嫌でしょう。防腐剤が必要かどうかとか、調べないと」

「う、うん」

「まあ、な」

ハムエがかビている姿を想像し、僕たちは頷く。

「ぜひお願いします！」

当然本人も相当嫌らしい。女の子だしね。

先生はそつとハムエのパン耳を持ち上げ、裏側を観察する。そのあと、髪の毛を触ってみたり、指紋を採取してみたり。さすがにスカート（というかハムというか）をめくろうとしたときは全力で止めたけど。

「なるほど」

先生は数回うなずいて。

「とりあえず、耳の先端のほうも血流が行って、生体活動してるみたいだから、カビとかに関しては安心していいよ」

「本当ですか。これで醜い姿を祐輝様にさらさないですみます」

嬉しそうなハムエ。そうだよな。僕もさすがにかビたり腐ったりしたハムエは見たくないし。

「で、結局ハムエは何の生き物だったんですか？ カビ問題でもっと重要な問題を忘れそうになってましたけど」

「なにっ、パンにとってカビのほうが重大な問題だろ」

「だからパンだったら血流が行ってるとかあり得ないし」

いい加減そつちの発想から離れてほしい。ハムエをただのハムエツグトーストで納得するのは無理がある。朝は急いでたから僕も納得しちゃったけど。

「うーん、詳しいことはわからないね。今まで発見された生き物のどれとも違うことは確かだと思うけど。こんな人間に近い生き物が発見されたら、大ニュースになるはずだし」

先生でもわからないか。

「ところで、ここからは相戸君と藤棚君にこの間の中間テストの話

なんだけど。あ、ハムエちゃんはもう帰っていいよ」

「ええっ、嫌なのです！ 祐輝様をお待ちするのです」

「ハムエ。待つてくれるのは嬉しいけど、外で待つてくれるかな。普通に立つてたら踏まれそうだし、椅子だしといてあげるから」

「嬉しいですか？ ありがとうございます、ワタクシも光栄ですっ、祐輝様にそんなに喜んでもらえるなんてっ」

ハムエは顔を真っ赤にして、うるんだ瞳でこっちを見つめる。そこまで嬉しかったのか……。なんにせよ、明と一緒にテストの成績で呼び出しじゃ、いい話なわけがない。できれば誰にも聞かれたくない。

椅子を外に運び出し、ハムエを座らせると、僕は恐る恐る理科準備室に戻った。それほどしくじった覚えはないんだけど、平均点が高かったのかなー。

「さて、ごめんね。脅かしちゃって。テストの話じゃなくて、ハムエちゃんの話の続きだけどさ、ちよつと本人に聞かれたくなくて」
野々宮先生は続ける。本人に聞かれたくない話、か。結構重要な話なんだろうな。

「実はさ 気になることがあるんだよね」

「気になることですか？」

「ハムエちゃんがハムエツグトーストでないとするならば、ハムエツグトーストが消えた謎が説明できないから、おそらくハムエちゃんはハムエツグトーストから孵化したと考えていいと思うんだ」

孵化、と来たか。理科の先生は言うことが違う。

「でも、産まれたばかりにしては中学二年生レベルの授業をちゃんと受けれるレベルの知能があるし、それに、好きになった相手が相戸君」

「僕が何で関係あるんですかつ！」

もしかしておちよくりたいんですか？ 明もニヤけるなッ！

「いや、相戸君は成績中庸、運動能力中庸、ルックス中庸だからね」
だめだ、この先生のポーカーフェイススマイルからまじめな話な

のかおちよくつているのか判断するには無理がある。

「それは、実験のサンプルとしては最良ってこと」

「実験って何の？」

明が身を乗り出す。自分が「実験のサンプル」なんて言われるとなんか不気味だ。

「ここからは僕の憶測でしかないんだけど……自然界でハムエちゃんみたいな生き物が生まれるって、すごく不自然なことだと思うんだ。だから、ハムエちゃんは遺伝子組み換えか何かで作られたんじゃないかな」

「遺伝子組換えだって？　なんか話がオーバーテクノロジーになってきたけどさ、何のために作ったんだよ。人間が作ったってことは、理由があるはずだろ？」

「例えば、生物兵器とか」

野々宮先生の笑顔が一層不気味に見えた気がした。

「生物兵器？　まさか、そんな、ハムエに限って」

大きさは小さいが普通のかわいい女の子ですよ。ハムエは。

「そう思わせることすら陰謀だとしたら？」

野々宮先生が普段では考えられないほど語気を強める。

「自分を好いてくれている相手を『生物兵器』だなんて誰も思いたがらない。しかし、もしある日彼女が生物兵器として覚醒し、破壊活動を始めたら？　相戸君は本気でハムエちゃんと戦うことができる？」

ゴクツ。自分で唾を飲み込んだ音が脳に響いた。今朝ここに来るとき、ハムエを連れてきてしまった理由を思い出す。

『さすがに自分に告白してきた女の子が鳥とか野良猫に食べられるのは嫌だ』

「それに、ベースがどこの家庭でも一般的な『パン』となるとハムエちゃん一人だけとは限らない。ハムエちゃんのような存在が

何万體も現れたら、世界がどうなるか想像してみて」

野々宮先生は話を続ける。僕は何人もの巨大なハムエが東京タワーやフジテレビを蹂躪する姿を想像した。

「パンデミック!?」

明が叫んだ。

「意味ちよつと違うけど、イメージとしてはそんな感じかな」

先生、今のはパンとパンデミックをかけた明なりのダジャレです。スルーしないでください。ああ、明が部屋の隅っこで床に「の」の字を書き始めた。

「もちろん、仮説の段階で行動を起こすわけにはいかないけど、彼女には気をつけたほうがいいかもよ」

先生がクスクスと声を出して笑う。やっぱり意図が読めない。

「なんか、そうなってくると運命の出会いというより未知との遭遇ですね」

「運命の出会い？ それはハムエちゃんが言ったのかな？」

「いや、今年のおみくじで 明は知ってるよな？ 一緒に神社に行っただし」

「あ、ああ！ 今日ってそういえばあの日か！」

明が大げさに驚く。その素振りだと忘れたフリしてたな。

ハムエの正体とは関係ないと思うけど、隠す理由もないので（いや、恥ずかしいという理由があるにはあるけど、明が絶対そのうち勝手に話す）先生にもそのことを打ち明けた。

「なるほど。 さて、そろそろ五時間目が始まるから教室に戻ったほうがいいよ」

先生は僕たちの話を聞き終えた後、思い出したようにこう言った。

「五時間目……って」

僕と明の顔が青ざめる。

「体育だ」

「ぎゃああああ！ 着替える時間ねえ！」

「急がないと！」

「あつ、祐輝様、お疲れ様です」

「ハムエも早くしないと、ゴリラの岡崎に殺される！」

ハムエのことはいまいち釈然としないけど、この際しようがない。
僕は廊下を走って更衣室に走った。

五枚目

「いたたたたた……」

「祐輝様、明様、大丈夫ですか？」

「ゴリラの奴、いまだき竹刀で生徒を叩くか？」

真っ赤にはれた背中をさすりながら、僕たちは帰路についた。六時間をまたいでいるのにまだ痛いとは、恐るべし、ゴリラ。さすがにハムエがゴリラにたたかれて無事なわけがないので、僕と明で必死にかばってよけいなダメージを食らった。

「すみません、私のために」

俺の肩の上でハムエが心配そうに言う。普通に歩かせると踏まれたりしそうなので肩にのっけて来たんだけど、そこで喋られると息が耳にかかってくすぐりたい。

「ハムエは悪くないよ」

「そーそー、悪いのはゴリラ！」

というか、五時間目のことをずっと忘れて話し込んでた僕たちが悪いんじゃないの。

「ところで明。藤棚ベーカリーって防犯カメラ付いてる？」

「付いてるけどそれが……ってまさか！」

さすが明。察がいい。

「ああ。お前の朝飯に回ってきたってことは、ハムエはとりあえず丸一日店頭にあっただってことだろ？」

前に世間話で愚痴ってたよな。「焼きたては店に置くから結局売れ残ったパンしか食べさせてもらえない」って。

「だったらさ、その間に誰かが店の食パンをすり替えたってことじゃないか。それが誰かを調べれば、ハムエの正体がわかるかも知れない！」

「私の正体、ですか？」

「ああ、いや……ハムエもいつまでも自分が正体不明のままじゃ、

「やっぱり嫌だろ」

「祐輝様、ワタクシのためにそこまで……ありがとうございます！」
ハムエがオーバーに喜ぶのを見て、僕は軽い罪悪感を覚える。ハムエが生物兵器かもしれないって、疑ってることになるんだよね。やっぱり。」

「でも、カメラのデータなんか勝手に持ち出したら、母ちゃんになんて言われるか」

「なんだよ、すり替えたってことは、犯人はお前の店のパンを万引きしたかもしれないってことだろ」

「それは許せねえ！ 絶対にとつちめる！」

だいぶ規模が小さくなったけど、明を乗せるためならしょうがない。こいつはどうでもいいことのほうが燃えるタイプの男だ。

「そうか、頼んだ」

「ああ。何とか母ちゃん説得して、防犯カメラのデータ調べたらお前に結果メールする」

「頼んだよ」

とか言ってるうちに、明の家の前に来た。

「じゃな」

「ちよつと待て。僕の肩にハムエが乗ったままなんだけど」

僕はとつと家に戻るうとする明の肩をがしっとつかんだ。

「あ、ハムエはお前にやる。試供品。お持ち帰りどうぞ」

「試供品って、お前」

「いや、ほかにもツッコミどころはいっぱいあるけど、どこからツッコめばいいんだろ。」

「ハムエもそつちのほうがいいだろ？」

「はいっ」

肩の上でハムエが軽く飛び上がる。

「じゃー後でメール入れるわ！」

僕の返事も聞かず、明は家の中に入って行ってしまった。僕がしばらく茫然としていると、ハムエが心配そうに僕の顔を覗き込んだ。

「祐輝様、ワタクシ、もしかしてお邪魔でしたか？」

「いや、そうじゃなくて、なんだろう。一瞬違和感がしたんだ。何だろう、何か矛盾しているような」

「それは、私を愛する気持ちと、私とはまだ出会ったばかりという事実が矛盾しているということですか？ 感激ですっ」

「ハハハ……」

笑ってごまかしたが、僕が言いたいのとはそんなことじゃない。なんだろう。具体的に何かはわからないけど、もっと決定的な。

五枚目（後書き）

そろそろカンのいい人なら真犯人に気付いたはずだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8256/>

ハムエの耳はパンの耳

2010年10月8日13時45分発行